

## 第 323 回研究例会発表要旨

### Summaries of Talks at the 323rd Regular Meeting

(2011 年 6 月 25 日 (土) 於：山梨大学甲府キャンパス)

#### 口頭発表

##### 山梨県上野原方言アクセントの特徴からの一考察

###### —東京周辺地域諸方言アクセントとの比較から—

三樹陽介 (國學院大學)

東京方言はいわゆる関東方言を基盤として成り立っており、関東地方の東京周辺地域には古い伝統的な東京方言アクセントの特徴を示すものが残っている。しかしそれらが東京方言の古相を示しているのか、もしくはその地域の伝統的なアクセントであり東京周辺地域で広く行われていたものなのかは、分けて考えなければならない。この観点から、本発表では東京方言の古相を示すアクセントが残存する山梨県上野原市方言を取り上げ、東京方言・東京周辺地域の諸方言アクセントとの比較を試みた。従来方言アクセントは 2 拍名詞の比較を中心に述べられることが多かったが、ゆれや異同の多い 3 拍以上の語を比較することで、東京周辺地域の諸方言の特徴を細かくみていった。

具体的には名詞 3・4 拍語を中心とする拍数の多い語を例に、都心から上野原市までとほぼ同距離にある神奈川県小田原市方言アクセントや、先行研究との比較を試みた。その結果、上野原市方言アクセントには東京方言アクセントの古相を示すものがみられるが、それらの一部は小田原市方言やあきる野市方言のアクセントにもみられ、東京周辺地域に広く存在していることがわかった。類の統合の進む形容詞では「小やかましい」「小うるさい」など、強調の「小」がついた語で、アクセントが頭高型のもは現在東京では衰退していると考えられているが、東京周辺地域には広い地域に残存していることがわかった。また、周辺諸方言との比較により、上野原方言独特の特徴的なアクセントを指摘するとともに、上野原市方言では漢語に周辺諸方言にはみられないアクセントの独自性があることを確認した。

このように東京の古相を示すものとは別に、その地域特有のものや、周辺地域に共通して広く分布するものがあることを論じた。

##### 言語獲得期の一歳児における 3 音から成る音声

坂井康子 (甲南女子大学)

母親と言語獲得期の 1 歳児のあいだで日常的に交わされた「3 音とポーズからなる唱えことば的な音声」に注目し、その音声の韻律的特徴を音響的に分析した。分析の結果、リズムのみならず抑揚の特徴も母子間で近似し

ていることがわかった。分析した母子の 3 音から成る唱えことば的な音声の最終拍は一貫して上昇しており、抑揚には一定の法則性がみられた。なお同児は、母親の音声表現を模倣するだけではなく、自発的に 3 音とポーズからなるまとまりを創り出しており、14 ヶ月時には、抑揚の特徴を保ちながら音韻を入れ替えて音声表現をしていた。これらのことから、観察した児は喃語期すでに抑揚も含めた韻律の特徴を自らのものとして獲得しているということが分かった。

上記の「3 音とポーズからなる唱えことば的な音声」の位置づけをおこなうため、3 音と知覚される音声 (NTT 乳幼児音声データベースの 4 児から) を抽出し、韻律的特徴に基づいた分類を試みた。「乳幼児の音声は、言語に向かう音声ばかりでなく、声の出ることを楽しんだり歌ったりする音声を含む」とする観点ももち、12 ヶ月と 17 ヶ月の喃語様音声を、①歌っているような 3 音音声、②等拍に近い 3 音音声、③ 3 音目が高い 3 音音声について、3 名によって聞き分けをおこなった結果を報告した。

##### 異音は音素より知覚しにくいのか

###### —英語話者が英語閉鎖音を知覚した場合

渡丸嘉菜子・荒井隆行 (上智大学)

近年、母語音声であっても音韻的結びつきが弱い音は知覚しにくいという報告がいくつか示されている。特に Hume and Johnson (2003) では、音韻的結びつきが弱い音は知覚しにくい、という仮説を立て、音の音韻関係を次のようなレベル別に示した。つまり、1) 音素的対立 (e.g. 英語の [l] と [r])、2) 部分的対立 (e.g. ドイツ語の [t] と [d])、3) 異音的対立 (e.g. 英語の [r], [ɹ], [ɹ̥], [ʀ]), 4) その言語に存在しない対立 (e.g. 日本語に無い [l] と [r] の対立) の 4 レベルである。本研究では、音素的対立と異音的対立に注目し、後者は前者より知覚的弁別性が劣るのかについて、英語話者による聴取実験を用いて調査した。さらに、異音の分布に焦点をあて、相補分布をなすものと自由変異をなすものでは弁別性に違いがあるかを調べた。その結果、音素的対立を示す音は異音的対立を示す音よりも弁別性が高いことが示された。さらに、異音知覚については、相補分布をなす異音は自由変異をなす異音よりも弁別性が高いことが分かった。

##### 参考文献

Hume, E. and K. Johnson (2003) The impact of partial phonological contrast on speech perception. *Proceedings of the 15<sup>th</sup> International Congress of Phonetic Sciences*.